



上智大学ヨーロッパ研究所主催 日本スラヴィスト協会共催シンポジウム概要

テーマ： スラヴ語・スラヴ文学の比較対照研究
－第16回国際スラヴィスト会議への日本の寄与－

パネリスト： 村田 真一
(上智大学外国語学部ロシア語学科教授、日本スラヴィスト協会会長)
小椋 彩 (東洋大学文学部助教)
伊東 一郎 (早稲田大学名誉教授)
中島 由美 (一橋大学名誉教授)
三谷 恵子 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

司会： 村田 真一

日時： 2021年1月8日(土曜日) 14:00-17:00

日本スラヴィスト協会との共催である本シンポジウムはZOOM形式で開催された。冒頭、日本スラヴィスト協会会長、国際スラヴィスト委員会日本代表委員を務める村田教授より、パネリストと同協会の紹介がなされた。

国際スラヴィスト大会は1929年よりスラヴ加盟国の持ち回りで開催され、日本は1978年よりオブザーバー参加、1983年より正式に参加している。本シンポジウムは2018年にベオグラードで行われた第16回大会での発表に基づく研究報告である。次回2023年の第17回大会は初めてスラヴ圏外のパリで開催が予定され、日本には8名の参加枠が設けられている。日本の若い研究者の積極的な応募が呼びかけられた。

また、本研究報告は上智大学ヨーロッパ研究所の叢書として出版が予定されている。

発表1：「アダムとリリスをめぐるスラヴのモダニズムとポストモダンの戯曲におけるカーニバル・モチーフ」(村田 真一)

3人のスラヴ人作家：-

- スワヴォーミル・ムロージェク (ポーランド、1930年-2013年)
- グレゴリー・ヤーロク (イスラエル在住ロシア人作家、1965年-)
- ミハイル・セメンコ (ウクライナ、1892年-1937年)

による、悪魔的(デモノロジー)な登場人物としてリリスが登場する戯曲のカーニバル・モチーフを通して比較演劇研究を行い、モダニズムからポストモダンへの移行や関係性に介在している要因を明らかにする報告がなされた。

発表2：「レーミゾフのゲストブック『黄金の書』をめぐる」(小椋 彩)

1877年モスクワ生まれのアレクセイ・レーミゾフは、革命後の1921年に出国、ベルリンを經由して1923年にパリへ亡命し、1957年にパリで客死している。本発表は2012年にパリからモスクワ博物館に移送された『黄金の書』と呼ばれるレーミゾフのゲストブック(7冊)の調査結果を中心に行われた。1943年に最愛の妻を亡くし、孤独なイメージの亡命作家レーミゾフであるが、亡命中であっても出版活動を精神的・物質的に支える友人、その家族、米川正夫を含む世界の芸術家らとの様々な暖かい交流があったことが報告された。

発表3：「スラヴ＝バルカン・フォークロアにおけるアレゴリー「死＝結婚」」(伊東 一郎)

スラヴ・バルカンフォークロアにしばしば出現する、死を結婚と見立てるアレゴリーの比較分析報告がなされた。戦場における兵士の“死＝結婚”というメタファーは、洗礼に始まり、結婚、そして死というキリスト教世界の普遍的な世界観をパラレルで表現する：-

- ロシアでは、既婚兵士が自らの戦場の死を、“剣”、“銃弾”、“墓”(何れも女性名詞)などを“娶った”、というメタファーで遺される妻にこれからの人生の自由を伝えた。
- ウクライナでは、独身コサックが“剣”、“墓”、“黒い大地”との“結婚”を母に遺した。
- バルカンでは、広範にわたって独身の死はよくないとされ、独身男性の死は婚礼衣装で葬る伝承がある。

個人の死＝終末であると同時に、フォークロアに表れる集団の死＝ステージの変化、というパラレルも表現する。

発表4：「言語地理学的地図作成から言語史再興へ」（中島 由美）

マケドニア語とブルガリア語において格変化の全体像は崩壊している。マケドニア語には人称代名詞に直接目的（旧対格）と間接目的（旧与格）の区別があり、それぞれに長形と短形が存在し、これらを二重使用することで、誰が、誰に、といったコミュニケーション上の間違いが起きない工夫がされているのではないかと考えられる。一方、ブルガリア語の人称代名詞長形はアルカイックに残存するだけで、現代語では前置詞によって意味の区別がなされている。

本発表は、マケドニア語方言における人称代名詞の用法の違いを地図上にコーパス化し、当該地域の言語構造変化に人称代名詞の二重使用が直接関わっていると解釈できる可能性を提示した。

発表5：「『シャハイシャ王の12の夢』—スラヴ世界の“孤児のアポクリファ”の研究方法」（三谷 恵子）

”孤児のアポクリファ“である『シャハイシャ王の12の夢』の原典、起源の所在、スラヴ世界への伝達経路、伝達系譜解明の研究手法が示された。このテキストの写本は19世紀に初めてロシアで発見され、その後もロシア、南スラヴ世界で写本が複数発見されているが、スラヴ語圏以外で類似のテキストは存在していない。本発表は、写本の内容、言語の時代、語法、書き換え等の比較分析によって、先行研究で明らかにされたステンマに新たな写本の位置づけを追加提示した。

この記録は、シンポジウム当日の録画データに基づき内容をまとめたものであり、記された内容は報告者の発言内容とは細部で異なる場合がございます。なお、シンポジウムで表明された見解は全て個人的なもので、必ずしも上智大学や当研究所を代表する見解ではありませんので、ご理解・ご了承下さいますようお願いいたします。